

障害学生支援の現状

日本社会事業大学における障害学生支援の現状について

ゲスト講師

群馬大学教育学部障害児教育講座准教授

金澤貴之

パネリスト

日本社会事業大学 教授

斉藤くるみ

同大学教授

辻 浩

同大学学生支援課長

木原清光

企画担当 学部4年

二神麗子・清水優江・三神陽菜

【本企画の概要】

障害者権利条約批准に向け、障害者基本法が改正された。それに伴い、障害のある学生へ合理的配慮の提供に関して、全ての大学等に求められるようになっている。本学（日本社会事業大学）でも2012年度4月に、視覚に障害のある学生が入学したのをきっかけに、講義における支援を実施している。障がい学生支援組織CSSOという学生団体が中心になり、支援者の募集やコーディネート業務等を行った。しかし、支援を実際に行っているうちに、様々な問題が生じ、学生だけで十分な支援を行うことが困難になってきた。

私たちは上記の経験を受けて、「よりよい障害学生支援のかたち」を求め、本分科会を開催することを決定した。まず、高等教育機関における障害学生支援に関する研究をされている群馬大学の金澤貴之准教授をお迎えし、基調講演をお願いした。さらに、本学の斉藤くるみ教授と辻浩教授より、本学の障害学支援に関する報告をしていただいた。後半は、本学の教職員と共に「よりよい障害学生支援のために」という題目に沿って、パネ

ルディスカッション方式で議論を行った。その際、聴講者からのリアクションペーパーの中からいくつか質問をピックアップし、その場で議論に反映させていただいた。当日はおよそ50名の方にご来場いただき、当企画は大盛況であった。残念ながら来場できなかった方や関心のある方に向けて、簡単ではあるが報告をしたい。

【企画を立ち上げた経緯・目的】（当日のP.Pと原稿を加筆修正した）

本企画を立ち上げた経緯と目的をご説明します。

1年前の4月に、A学生が本大学に入学。

A学生は弱視のため、講義中に板書の文字が見えない、パワーポイントの資料が見えない、映像資料の字幕や情景が見えない等の困難さを感じていました。そこでA学生は学生支援課に相談したところ、障害学生支援を行っている学生団体のCSSOを紹介され、「ノートテイク等奨学金」の申請を勧められました。

前期の間の講義支援は、CSSOの内部で支援学生募集、人員配置、連絡、調整、謝礼金の受け渡し等をやっていたため、負担が個人（CSSOの調整係とA学生）に集中していました。

そのため、十分な支援ができない、課題の整理ができないまま、前期が終わってしまいました。

前期終了後の7月8月で課題を整理したところ、2つの課題が浮かび上がってきました。

- ① 前期の支援は学生だけでやらざるを得ない状況であった
- ② 支援における課題の共有ができていない

①の問題点は、社会資源として存在していないサポート（公的な支援マニュアル等がない状態）を学生だけでまかなおうとすると、その内容や質にムラや不安定さができてしまいます。そのため、

支援における課題②

○②支援における課題の共有ができていない

□【障害学生】【大学】【CSSO】

の3機関の役割が縦割りに

なっていたこと

その結果...

個別対応、その場しのぎの対処で終わってしまう

大学—CSSO
CSSO—障害学生
障害学生—大学

本企画の目的

- 障害学生支援の全国的な動向
- 日本社会事業大学における障害学生支援の現状

- よりよい障害学生支援とはどういうものか
 - 具体的なイメージの提案
 - イメージの共有

学校側が社会資源を活用できるような力を学生と一緒に作る必要があると感じました。

②の問題点は、「障害学生」「CSSO」「大学」の3機関の役割が縦割りになっていたこと。パワーポイントの四角で囲った図のように、それぞれミーティングは定期的に行われていたのですが、同じテーブルで顔を合わせることをしてきませんでした。

そのため、対応が個別対応になり、その場しのぎの対処で終わってしまい、①②のような状態が、2012年度の前半は慢性的に存在していたという状況でした。

そこで、2012年11月から、週1回、学生支援課の担当職員と障害学生とCSSOの担当者が一同に集まって、ミーティングを行うようにしました。そうすると、支援に関する問題点や課題が三者に共有されるようになり、すこしずつ新たな社会資源を使ったり、協力して支援を行うことができてきました。例えば、大学図書館と連携し、清瀬市にある「声のボランティア」という団体に依頼し、図書館にて対面朗読サービスを使えるようになったことなどがあります。

このように、ようやく障害学生支援がスタートラインに立ったと私たちは感じています。しかしながら、課題は全て解決されたわけではなく、さらによりよい支援の形を提案できればと思い、様々な方の協力の上で、本分科会を企画すること

ができました。改めて感謝を申し上げます。

この発端は、視覚障害に限定されていましたが、体系だった視覚障害学生支援ができつつあるので、視覚障害学生支援で構築されたリソースを他障害にも活用できるのではないかと思っています。

本企画の目的としましては、

- ・障害学生支援の全国的な動向
- ・日本社会事業大学における障害学生支援の現状

を理解していただき

・よりよい障害学生支援とはどういうものなのか、具体的なイメージを提案・共有できればと思っています。

以上で、本企画を立ち上げた経緯と目的について、終わらせていただきます。

【ゲスト講師による基調講演】

続いて、ゲスト講師の金澤貴之准教授から、障害学生支援の全国的な動向について講演していただいた。

金澤氏は、主に聴覚障害児教育・聴覚障害者支援関連の研究を行っており、10年ほど、聾学校幼稚部での手話の導入をめぐる議論に関する研究が続けられている。その一方で、最近は大学での聴覚障害学生支援、聾重複児の教育等の研究も進められている。金澤先生が平成12年4月に群馬

社大フォーラム
「組織」としての障害学生支援

群馬大学教育学部
金澤貴之

なぜ組織的支援が必要なのか

- ※ 担当者が変わっても、どの学部や専攻でも、基本的には同質の支援が得られることが保障されているということ。
- ※ 保障されるために必要なのは、ルールと予算
つまり…
- ※ 実施すべき内容、権限と責任の所在がひとまず明示されている。
- ※ その都度、新しい取り決めが必要になった際、どこで誰が決めるのが明示されている。
- ※ 必要な予算の学内措置がなされている。(毎年、そのつど学長裁量経費を申請したり、外部予算に頼るのではなく)

「組織化」において注意すべき課題

- ※ 専門性をどう担保するか
・コーディネーターは現場レベルでの判断
・専門職員の関与（聴覚、発達、視覚、肢体不自由、等）
- ※ チェック&バランスが動くか？
・一人に権限が集中しないこと
・専門性の視点と専門外からの視点
- ※ トップダウン&ボトムアップが機能するか
・依頼・指示はトップから。ニーズ吸い上げは多方面から。
- ※ トラブル（ハラスメントを含む）に迅速に対応できるか？
・相手に応じて多様な対応を用意しているか

社会事業大学に求めること

- ※ どの大学でもすべきこと（文科省報告「一次まとめ」に記載されているレベル）は最低条件。めざすべきはその先！
社会事業大学の理念が見える支援体制を。
- ※ 社会福祉のトップリーダー（「西の日福、東の社事大」）
- ※ 私大と国公立大の中間的存在。私大だが、厚生労働省による社会事業学校等経営委託費という公的助成を得ている。すなわち大学としての「社会的責任」がある。
- ※ 参考となるモデル、考え方：障害社雇用の好事例
・企業の社会的責任（CSR）として
・善意としてでなく、コンプライアンス（法令遵守）として
・義務、負担としてでなく、戦力として

大学に赴任してからは、障害学生支援室の組織体制構築に尽力され、平成22年度には障害学生支援室の組織化が実現した。

金澤氏から障害学生支援に関わる法行政の動向について、解説いただいた。特に、[改正障害者基本法]の第4条に関して「社会的障壁の除去は（中略）その実施について必要かつ合理的な配慮がなされなければなら」ず、大学等における合理的配慮とはどういうものであるか、[障がいのある学生の修学支援に関する検討会報告（第一次まとめ）]を提示しつつ、具体的に説明した。

さらに、[第一次まとめ]には支援体制に関する提言も示されており、そのための要件として以下の項目を挙げた。

1. 学長がリーダーシップを発揮
2. 大学等全体として専門性のある支援体制の確保

3. 学内の役割分担を明確化

具体的には

- 1) 障害学生の支援を専門に行う担当部署の設置
- 2) 人員配置（専門性のある専任教職員、コーディネーター、相談員、手話通訳等の専門技術を有す支援者等）
- 3) 学内部署との連携

ほかにも・学生相談に関する部署・施設、保健管理に関する部署・施設、学習支援に関わる部署・施設、障害に関する様々な専門性を持つ教職員

このほかに学生支援者について[第一次まとめ]では、「学生を支援者として活用することを肯定しつつも「一部の学生に過度な負担がかかることや支援に携わる学生と障害のある学生の人間関係に問題が生じる場合があること」に留意することと明記されていることに関しても言及があった。

次に、「なぜ組織的支援が必要なのか」につい

て説明があった。組織的支援というのは、担当者が変わっても、どの学部や選考でも、基本的には同質の支援が得られることが保障されているということであり、そのために必要なのはルールと予算である。つまり、実施すべき内容、権限と責任の所在がひとまず明示されていることと、新しい取り決めが必要になった際、どこで誰が決めるのかが明示されていること、必要な予算の学内措置がなされていること（毎年、そのつど学長裁量経費を申請したり、外部予算に頼るのではなく）が必要であるということである。また「組織化」において留意すべき課題を挙げた上で、「社会事業大学に求めること」について、第一次まとめに記載されているレベルは最低条件で、目指すべきはその先、「社会事業大学の理念が見える組織体制を」とのことであった。社会福祉のトップであり、厚生労働省による社会事業学校等経営委託費という公的助成を受けているため、大学としての「社会的責任」がある。障害者雇用の好事例が参考になるモデルで、「企業の社会的責任（CSR）として」「善意としてではなくコンプライアンス（法令遵守）として」「義務、負担としてではなく、戦力として」障害学生支援を捉える必要があるだろう。

講演全体を通して、障害学生支援体制の組織化が重要な意味を持つこと、それから、日本社会事業大学が目指すところの支援について、先を見据えたモデルが提案された。

【日本社会事業大学における障害学生支援の現状】

斉藤くるみ教授と辻浩教授より、日本社会事業大学における障害学生支援の現状という題目で講演していただいた。まず、日本社会事業大学の聴覚障害学生の情報保障について尽力してこられた斉藤教授に、同大学における聴覚障害学生の支援を中心に報告していただいた。現在のように、障害があっても大学に入学できる時代では無かった頃から、同大学は積極的に障害学生を受け入れてきた歴史がある。現在も多くの学生（聴覚障害学生支援のノートテイク等）による協力のおかげで障害のある学生も学ぶことができているとの報

告であった。

次に、辻教授より2012年度から行われている視覚障害学生支援をもとに学生から提出された「意見書」（文末に記載した）を受けて、学校側の回答内容等を中心に報告していただいた。このような要望を出してくれるのは非常に有り難いことであり、「意見書」等の学生の声を受けて、ディプロマポリシー等に反映したとの報告があった。また、「意見書」に記載されてある事項に関しては、8割ほど解決したのでは、と考えている。これからも学生から更なる意見を聞きながら、善処していきたいとの旨であった。

【パネルディスカッション】

5分間の休憩の後、斉藤教授・辻教授からの報告と会場のリアクションペーパーの中から、金澤氏に問題提起していただき、ディスカッションに入った。ファシリテーターは金澤氏、パネリストは辻教授、斉藤教授、学生支援課の木原課長。

結果的に時間が足りないほど白熱した議論となり、全てを記録することは難しいため、企画終了後に回収したアンケートとリアクションペーパーに記載されたコメントから一部抜粋する。

- ・学生さんが積極的に活動されていることが分かってよかったです。
- ・大学の主体性を期待したい。
- ・トラブル対応等、明文化の必要性は私も感じた（規約など）。
- ・運動障害や発達障害、学習障害等の支援もしてほしい。
- ・障害学生の困り感が見えていない。
- ・社大にもスーパーバイズが必要だと思います。もっと外の社会資源などを活用する工夫を期待します。（この分科会を実施したことは）より良くするためにやっていることで、すごい勇氣だと思います。
- ・学生の説明（現状や課題）がわかりやすかった。
- ・障害があっても同じような学校生活を送れるように支援（組織的に）をしてくれるのはとても

すごいことだなと思いました。

- こういった企画は全国的に見ても、PEPNetやJASSOの他になかなかないので、障害支援のあり方を考える機会の提供や障害学生支援の啓発という観点でも、どんどん進めてほしい。
- (ディスカッションにおいて) 金澤先生と大学側の温度差を感じた。
- 臨機応変に対応できるのが社大の良さだと思った。
- 支援者側の視点を中心にした分科会の展開は面白かった。
- この内容を今後とも継続してほしい。
- 学生の学ぶ権利をまもってくれているのはとてもありがたい。
- 障害学生支援の歴史と厚みと問題点がよく理解できました。

- 今後、先生方が他大学を参考にしながらも先駆的な取り組みを行ってくださることを期待します。
- まさに数年前、障害学生支援の(大学に対して)交渉を担当していました。当時の活動が今も継続され、このように発展したことのうれしさと、「一部の学生に負担が集中している」と当時大学に伝えたことが、まだここに書かれていることに対して残念な気持ちになりました。学生の努力に頼らない支援という、客観的評価や根拠の数値化が難しい中で現場をまとめ、連携がスムーズに行える組織マネジメント力は(福祉の)現場でも求められています。組織体制をどのように構築すべきか今後ぜひ談義していただきたいです。

<h1>参考資料</h1> <h2>学生からの要望書</h2>	1
---------------------------------	---

<h3>今後の学内障害学生支援体制のあり方について(学生からの提案)</h3> <p>～全ての専攻課程に対して可能な、障害学生個人の特性にあわせた ワンストップな支援を実施できる体制を目指して～</p>	2
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------	---

<h3>学内の障害学生支援に関する現状と課題</h3>	3
-----------------------------	---

A) 聴覚障害以外の障害について、支援の専門家がいけない状態である。そのため、障害種別により分けられる支援の種類と質に差が生じている。

B) 社大には障害学生支援室のような、障害種別を超えて支援の様々な面をコーディネートし、効果的に運動させる機能がない。そのため、障害学生・支援者(主にCSSO)に大きな負担がかかっている。

C) 支援に関する明確な要項やポリシーがなく、支援を行うにあたっての大学の責任が不明確である。そのため、一学生団体であるCSSOに負担が大きい。

D) 支援を受けるにあたっての障害学生自身の負担が大きい。(聴覚以外)

E) 講義での支援に限りがちで、就労支援や障害特性を踏まえた学生としての成長を促す支援が不足している。特に、障害者の就職については、特別の相談援助・トレーニング等が必要であるが、現状ではそれがない。

<h3>障害学生支援体制を構築・整備することにより期待されること</h3>	4
---------------------------------------	---

【ゴール】

- 障害区分に関係なく、全ての障害学生の障害内容・特性に配慮した障害学生支援をワンストップで行える支援体制が大学内に組織化される
- 個々の障害学生は、上記の障害学生支援専門窓口の支援を活用することで
 - ✓ 他の社大生と同程度の柔軟な学生生活が送れるようになる
 - ✓ 入学卒業後、ソーシャルワーカー等の支援者として現場で活躍できる人材となる。

(大学で適切な支援を活用しながら個々の障害特性に応じたキャリア教育・就労支援を通して、4年かけて支援を受ける学生(初年時から)と社会人・ソーシャルワーカー(支援者)としての目覚めを促す取組) **※ 専攻・専攻領域・専攻種別を踏まえて、特にマイノリティ学生に対する支援を強化し、大学から社会へのスムーズな就労移行を目指す**

- 障害学生をソーシャルワーカーとして養成するとともに障害者福祉に関するピアソーシャルワーカーとして養成できるようになれば、他の福祉大学との差別化を図ることができる

※ 障害学生支援体制を一本化するにあたり、一定程度の準備期間を必要とする場合は、支援体制ができるまでの間に生じている個別・具体的な課題について、緊急性・重要性的な2側面から優先順位をつけて、学校側の責任として一つ一つ改善・解決し、改善・解決に向けた取り組みの経過や結果を、障害学生及び学内関係者に報告・周知する。

	5
--	---

**現在起きている個別・具体的な課題と
解決するための要望・提案**

<p>A) 聴覚障害以外の障害について、支援の専門家がいない状態である。そのため、障害種別により受けられる支援の種類と質に差が生じている。</p>	<p>(問題・課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 聴覚障害者学生支援プロジェクト室(以下、PJ室と記載)では、高い専門性を持ったマネージャーがおり、聴覚障害者学生からの大学生活、学生生活全般の相談を受けることができ、常にアセスメントやニーズを引出し出すことが可能である。一方、聴覚以外の障害者学生に対しては、授業以外の学生生活及び日常生活に関する相談・支援の専門性を持った教職員がいないため、アセスメントができず、潜在するニーズが引き出せていない。加えて、大学側から障害者学生支援に関する具体的な提案がないため、対処療法的な対応になっってしまう。 ■ 映像を使用する授業において、映像内の字幕が小さく、授業内容を理解できない、PJ室で映像内の音声情報や文字をおおとして当日担当講師から聴覚障害者学生に文字起こしの資料を手渡ししている。視覚障害支援では、字幕情報を独自に文字起こしする支援体制・余力がないため、当日支援学生※1)は、ほとんど文字情報を小さく読み上げる事で対応してはいるが映像の遅延に慣いづかないこともあり、映像内容を十分には理解できていない。 ■ 支援者養成などを行える人材がいないため、障害者学生本人がその程度説明せざるを得ず、負担が大きくなっている。 ■ 学生支援課の職員が障害者学生支援の担当であるが、専門性がない。専門知識が無いのは仕方ないが、支援制度全体を把握していないため、支援の見通しが立たず、利用学生※2)や支援学生に不利益を与える可能性がある。 <p>※1 支援学生：授業中に情報機器を利用する有難がランテックの学生のこと ※2 利用学生：聴覚学生で授業時の情報機器支援も利用している学生のこと</p> <p style="text-align: right;">6</p>
---------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>A) 聴覚障害以外の障害について、支援の専門家がいない状態である。そのため、障害種別により受けられる支援の種類と質に差が生じている。</p>	<p>(要望・提案)</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 教員向け及び職員向けの障害者学生支援研修会がJASSOにて随時開催されている。そこに参加して、聴覚学生支援に関する研修を受けてほしい。 ■ プロジェクト室マネージャーから適宜アドバイスをもらう。 ■ 聴覚障害者学生高等教育支援ネットワーク (PEPNet-JAPAN) やJASSOの研修会に参加する。 ■ 少なくとも支援制度の全体と1年間の支援スケジュールを知ってほしい(マニュアル本も出版されている)。 ■ 聴覚障害以外の障害にも詳しい専門職員を配置する。または、PJ室マネージャーの岡田さんに聴覚障害以外の障害分野の支援マネージャーも担当してほしい。 ■ 大学教職員の専門的理解を得る。 <p style="text-align: right;">7</p>
---------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>B) 障害種別を超えて支援の様々な面をコーディネートし、効果的に運動させる機能がない。そのため、障害者学生・支援者(主にCSSO)に大きな負担がかかっている。</p>	<p>(問題・課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 同一の支援学生が、聴覚障害・視覚障害の両方の情報保障支援に入っていることがある。しかし、それを効率的に調整・共有するための部署がないため、支援学生一人に対して全体的な負担が何となく高まっているのが、聴覚障害者学生支援プロジェクト室(PJ室)や人的配置・連絡の担当をしているPJ室学生コーディネーターが常に聴覚障害のシフトを気にしなければならぬ状態を管理している。そのため、PJ室関係者・学生コーディネーターの負担が大きくなっている。 ■ 視覚障害支援のコーディネーターを行っている学生(CSSO所属)と利用学生間で、実施している支援内容や、その中の課題点等を共有するミーティングを週次で行っており、そのミーティングに学生支援課も出席し情報共有を行っている。しかし、そこで協議された視覚障害者学生支援に関する内容や課題点を、聴覚障害者学生支援PJ室マネージャーと学生支援課間で、共有したり足並みを揃えるための打ち合わせを行う機会が設置されていない。 ■ 情報共有や支援の運動がうまくいかないため、各障害の支援を行うときに二重手間があつたり同じことを別の人がやるなどの無駄が生じている。 <p style="text-align: right;">8</p>
----------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>B) 障害種別を超えて支援の様々な面をコーディネーションし、効果的に運動させる機能がない。そのため、障害学生・支援者(主にCSSO)に大きな負担がかかっている。</p>	<p>(要望・提案)</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ シフト管理や授業支援に入る支援学生の管理・フォローを行う窓口を一本化し、支援学生一人当たりにかかる負担をコントロールし、学校側が責任を持つて感覚障害・視覚障害の授業支援全体の適切な支援学生の配置を行えるようになるようにしてほしい。 ■ 学生コーディネーターやPJ室、及び大学側の管理者が同時に情報共有でき、その時々で発生した課題を解決していく上でかかる時間・工数を最小限に抑えられたり作成・管理を行ってほしい。 ■ PJ室のリリースを活用し、PJ室で音声情報を文字おこしする際に字幕情報も一緒に同一資料内に入力してもらい、授業当日に紙資料として配布してほしい。 ■ 現在、視覚障害の利用学生や支援学生からPJ室でキーボードに個別に共有しているが、学生からの伝え聞きになってしまう為、定期的に情報共有・協議する場を設定して、組織間で運動できる仕組みを整えていってほしい。
-----------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>C) 支援に関する明確な事項やポリシーがなく、支援を行うにあたっての大学の責任が不明確である。そのため、一学生団体であるCSSOに負担が大きい。</p>	<p>(問題・課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 視覚障害学生の情報保障支援(主に、支援学生の募集・配置・シフト管理・連絡等)は2012年度はCSSOが主体となって行っていたが、CSSOはあくまでも一学生団体という立場である為、支援に関する何かトラブルが起きた場合に、CSSOの学生が対応するにはあまりにも負担が大きい。また、一学生である以上、大学の責任者にはなれないので、最終的な決断や責任をとる対応をすることはできない。 ■ しかし、大学がやるべきこと、学生団体が協力できることの線引きがあいまいで、現状ではCSSOの学生が何となくしよとどこまで動いている。そのため、負担が大きすぎる。 <p>例えばは…</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 支援学生が入れ替わるたびに、視覚障害学生支援の人的配属を担当している学生(CSSO)が支援学生と利用学生の顔合わせを行っている。しかし、その学生も自分が実施する授業の合同をめぐって調整・調整している為、大きな負担がかかっている。 ● 必修科目が毎年変動したり、どうして支援が見つからない、情報があつたりするが、見つかるまでCSSOが動かさざるを得ない。最初はCSSOに入っている学生の中で好んで支援者を募集したが、なかなか支援者が揃えられない。また、PJ室のメンバーは、PJ室のメンバーの都合で変更されることがある。PJ室のメンバーはPJ室のメンバーを兼ねていたり、PJ室のメンバーがPJ室のメンバーとして支援に入れる学生が決まらなかった。) <ul style="list-style-type: none"> ● 教壇でも学生があまり少ないため、現在入っている支援者が休んだ際に、代わりの人がいないという危惧的な状況が生まれてしまう。特に道順の場合は負担が大きい。(支援の当日あるいは前日の夜に欠席連絡があった場合は、CSSOの担当学生は休んでいたり、講義中だったため対応困難。実際に、支援当日の朝に支援者が欠席連絡をしてきたため、その連絡を担当学生は超絶し、すぐに代わりの支援者を探し求めたという状況があった。)
---------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>C) 支援に関する明確な事項やポリシーがなく、支援を行うにあたっての大学の責任が不明確である。そのため、一学生団体であるCSSOに負担が大きい。</p>	<p>(要望・提案①)</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢ 大学としてのポリシーを作る。 <ul style="list-style-type: none"> ● どうしても支援できなかつたときに責任は誰が持つのか。 ● どうしても支援者が見つからず、もし支援の穴があいた場合に、利用学生の議義保障はどうするのか。権利保障の責任は誰が負うのか。 ● 学校側が責任を持って障害学生支援を担う人員の募集・管理・トラブル対応を行う。 ● 学生団体ができる範囲をはっきりさせる。
---------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>C) 支援に関する明確な事項やポリシーがなく、支援を行うにあたっての大学の責任が不明確である。そのため、一学生団体であるCSSOに負担が大きい。</p>	<p>(要望・提案②)</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢ 学内で調達できない場合は学外の支援団体も含めて支援者を確保する。 ➢ ポスター等で常に宣伝をし、全学的に支援者を募集を行い、支援者の母集団を増やす。 ➢ 支援希望者がスムーズに支援に入れるようなシステムの構築(受付窓口の周知など)。 ➢ 年度初めのオリエンテーションで公式に宣伝する。 ➢ 教務課がメンバーシップ等の活用をし、緊急時に代わりの支援学生を探す。もしくは支援課の職員が対応するなどして、支援の穴が空かないようにする。 ➢ 全登録支援学生の時間割を把握しておく。 ➢ 1週間未満の授業だと支援課が代わりを探す。もしくは支援学生本人が責任を持って代替の支援者を探し、支援現場でのトラブルは利用学生と支援学生が直接連絡を取り合つて対応する。もしくは支援課が仲介する等の細かいルールを決める必要がある。 ➢ 学生支援課から有償ボランティアとして緊急に募集した。 ➢ ゼミの先生から呼びかけてもらった。 <p>※ 下線は2012年度後期の途中で実施。</p>
---------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>D) 支援を受けるにあたっての障害学生自身の負担が大きい。(聴覚以外)</p>	<p>(問題・課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 支援学生一人一人の授業支援スキルにはばらつきがある。また、期の途中から支援学生が入り替わることも多々ある為、支援学生が恐るる御座る授業開始前、利用学生が支援学生に支援方法を説明してあり、利用学生に大変負担がかかっている。 ■ 支援方法が希望する授業支援を受けられないこともある。 ■ 支援学生に対する謝礼の配布方法は、支援学生に対して毎回授業開始前に現金(1コマ90分 1260円)で手渡しし、利用学生も受領確認の為毎回印鑑を持参しなければならぬ。利用学生にとって毎回現金を用意し、当日持参するのは大変負担であり、利用学生も毎回謝礼を受け取り印鑑を持参するのは負担である。 ■ 授業支援に要する備品(書き写し用紙・筆記の購入、在庫管理は、聴覚障害支援ではPJ室にて一括で購入・管理しており、支援学生も支援に入る授業前の休演時間PJ室に備品を受け取りにくるようになっていた。一方で、視覚障害支援の場合、利用学生個人が年度備品の購入、在庫管理・授業時に持参しなければならず、利用学生にとって大変負担である。 ■ 機材が重い(約10kg)為、会場移動に時間(機材のセッティング及び片づけ、エレベーターでの移動により大変時間がかかる)と労力がかかる。特に、階段教室のB101、B201は前方の入り口から出入りする為には、機材を持ち上げながら何段もの階段を上り下りしなければならぬため、物理的な負担も重く、授業開始時間に間に合わないこともある。
--------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>D) 支援を受けるにあたっての障害学生自身の負担が大きい。(聴覚以外)</p>	<p>(要望・提案)</p> <ul style="list-style-type: none"> ➢ 支援方法の統一・支援スキルの向上を図る為、支援学生として学内で募集して登録した学生を対象に、学校側の主催で聴覚障害授業支援の研修会を開催する ➢ 謝礼の支払い方法については支援に関する報告書も支援費に提出することになっているため、その報告書と共に大学側から支援学生に直接手渡すか銀行振込等で対応してほしい。 ➢ 授業支援に要する備品の購入、在庫管理・支援学生に対する備品の受け渡しは、学生支援課にて行ってもらいたい。 ➢ 一番の要望は階段ではなく、スロープを設置していただくことであるが、対応が難しいようであればせめてB教室での授業は会場前方までスロープで行くことができればB301、B401のどちらからか実施していただくよう会場を調整していただきたい。
--------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>E) 就労支援や障害特性を踏まえた学生としての成長を促す支援が不足している。特に、障害者の就職については、特別の相談援助・トレーニング等が必要であるが、現状ではそれが無い。</p>	<p>(問題・課題)</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 社大では採用現場で活躍するソーシャルワーカー(支援者)を養成し輩出しているが、障害学生も同様に現場で活躍する支援者となるように養成していく必要がある。 ■ その上、障害者福祉に関するピアソーシャルワーカーとして障害学生も卒業後に活躍していくために、障害者専門的就労支援・キャリア教育(※3)を行う必要がある。 ■ 上記のような専門的な就労支援・キャリア教育の必要性に対して、聴覚障害支援ではPJ室にて専門的に対応しているが(※4)、それ以外の障害学生にはどのような専門的な支援がない。 <p>※3 障害者専門的就労支援・キャリア教育：自・主・性・自覚性を向上していく為のキャリア教育・就労支援等</p> <p>※4 聴覚障害学生支援PJ室で実施しているキャリア教育・就労支援PJ室： 聴覚障害学生支援PJ室の支援は主にPJ室で行われており、聴覚障害学生はPJ室にて必要に応じて適切なメールの書き方、文章指導、必要に応じて就職活動を受けるための面接練習の仕方等の支援も提供している。 これをもっと充実させ、2013年度は支援を主体的に活用するスキルを教えたり、将来の専門職としてのスキルの向上を促す等、エンパワメントワークショップを実施する予定であると考えている。 この他に、聴覚学生から就職活動を行うにあたって個別に相談を受け付けており、例えば、ピアソーシャルワーカーになる為には障害者認定書が必要となる為、ピアケアを届けたり、選定テストを受ける等、</p>
-----------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>E) 就労支援や障害特性を踏まえた学生としての成長を促す支援が不足している。特に、障害者の就職については、特別の相談援助・トレーニング等が必要であるが、現状ではそれが無い。</p>	<p>(要望・提案)</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 聴覚障害以外の障害学生にも、PJ室が実施しているようなプログラム等を参考に、障害種別に応じた専門的な就労支援・キャリア教育を実施してほしい。
-----------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

その他、障害学生や支援にかかわっている学生から聞いた問題・課題
(学生生活を中心に採録)

課題	学生生活の改善(〇)に繋がっている問題(△)	現状	研究 採集 実況
◎ 授業や講義(リファイン)について	◎ 授業や講義(リファイン)について	◎ 授業や講義(リファイン)について	◎ 授業や講義(リファイン)について
◎ 設備が整っていない	◎ 設備が整っていない	◎ 設備が整っていない	◎ 設備が整っていない
◎ 生活がハードな支店(お風呂)について	◎ 生活がハードな支店(お風呂)について	◎ 生活がハードな支店(お風呂)について	◎ 生活がハードな支店(お風呂)について
◎ 学費がつかっていない	◎ 学費がつかっていない	◎ 学費がつかっていない	◎ 学費がつかっていない
◎ 家の環境が整っていない	◎ 家の環境が整っていない	◎ 家の環境が整っていない	◎ 家の環境が整っていない

文科省報告における望まれる障害学生支援組織の体制(1)

■ 平成24年12月21日付で障がいのある学生の修学支援に関する検討会報告(第一次まとめ)が文科科学省より示された。そこでは支援体制の整備及び人員配置について以下のように示されている。

- (5)支援体制(専門性のある支援体制の整備)
以下の要件が必要
1. 学長がリーダーシップを發揮
2. 大学等全体として専門性のある支援体制の確保
3. 学内の役割分担を明確化

具体的には、

1. 障害学生を専門に行う担当部署の設置
2. 人員配置
 - ・コーディネーター
 - ・相談員
 - ・手話通訳等の専門技術を有する支援者等
3. 学内部署との連携
 - ・学生相談に関する部署・施設
 - ・設備管理に関する部署・施設
 - ・学習支援に関する部署・施設
 - ・障害に関する様々な専門性を持つ教職員

課題	学生生活の改善(〇)に繋がっている問題(△)	現状	研究 採集 実況
◎ 障がいのある学生の修学支援に関する検討会報告(第一次まとめ)について	◎ 障がいのある学生の修学支援に関する検討会報告(第一次まとめ)について	◎ 障がいのある学生の修学支援に関する検討会報告(第一次まとめ)について	◎ 障がいのある学生の修学支援に関する検討会報告(第一次まとめ)について

文科省報告における望まれる障害学生支援組織の体制(2)

■ 尚、同報告書では、学生支援者の活用について以下のように述べられている。
(学生の支援者の活用)
○障害のある学生の日常的な支援には、多数の人材が必要となる場合が多いことから、学生を支援者として活用することも一つの手法である。

○一方で、学生の支援者の活用にあたっては、一部の学生に過度な負担がかかることや支援に携わる学生と障害のある学生の人間関係に問題が生じる場合があることから、これらに十分留意するとともに、障害の知識や対応方法、守秘義務の徹底等、事前に十分な研修を行い、支援の質を担保した上で実施することが重要である。

※本学における障害障害学生支援は、過去にCSSOの学生主体で行われてきた経緯がある。その結果、一部の学生に過度な負担がかかるなどの上記の問題点が生じていた。また、現在、視覚障害学生支援においても、一部の学生に過度な負担がかかっている。